

# 長畝ふるさと通信



【2025年6月号】

## ■ 生育は若干遅れ気味です



田植は5月末に終わることができましたが、後半は低温、日照不足、強風などの影響を受け若干の生育遅れとなっています。雨は適度に降ってくれたので今のところ、昨年のような水不足は心配ないようです。6月前半はとにかく草刈り。雨が多かつたせいで畔の雑草は伸び放題で自走式の草刈機では対応できず、背負い式の刈り払い機で草をなぎ倒すようにして刈りました。特に大きな川の堤防沿いの排水路は年一回



の草刈りなので草丈は御覧の通りです。急斜面の法面幅は約8m、全長およそ600m以上あり、困難を極めます。しかしこのまま放置してしまうと雑木化してカメムシの快適な生息地になってしまうのでこの時期(6月後半)の必須作業なのです。できる事なら業者に丸投げしたいところですが、なかなか受け手が見つかりません。いつまでできる事やら・・・。

## ■ 生きもの調査は何のために

トキ認証米の必須要件に年2回の「生きもの調査の実施」があります。令和20年産米からず〜と継続して取り組んできていますが、一部ではその必要性を疑問視する声も出ています。発足当初は「トキの野生復帰を田んぼから応援する」ために餌となる生きものたちを増やし、その結果を生産者自ら確認するとともに、おコメの安全性を発信するしていこうという分かりやすい目標がありました。しかし今となっては野生下のトキは600羽まで増え、食の安全はもはや当たり前のご時世です。

ここからは私見ですが・・・

令和のコメ騒動をきっかけに、お米の価値を見直そうという状況が生まれてきています。

日本人にとって「コメ」は単なる食糧ではない、先祖から脈々と引き継がれたDNAに深く浸透したものだ実感しました。生産者にとって持続可能なコメの適正価格とはいくらなのか、消費者はいくらなら納得するのか、双方が全て一致することは個人的には不可能だと思っています。国が制度として支えなければこの矛盾を解決できないと考えています。と言うことは自分たちのコメを納得して食べていただけるける消費者と理解して販売してくれるお米屋さんと直接結びつく以外に方法はありません。私たちが目指すのはトキを冠とした生物多様性農業を実践し、佐渡でしか作ることができないコメを作ることです。田んぼは単なる「コメ生産工場」ではなく、生きものたちの住処であり、彼らと共存するふるさとの風景そのものです。生きものたちが棲めなくなればトキも棲めなくなり、人間の都合だけで食糧生産すれば里山は無くなり、結局農業もできない環境となってしまいます。生きものを見るということは、世の中人間の都合だけではないということ戒めることと思っ



ています。6月は地域の人々や子供たちと何回も生きもの調査をして、彼らと触れ合うようにしています。備蓄米の大放出で残念ながら価格でしかコメの価値を判断しない消費者が存在することも理解できましたが、一方でコメを大切な主食として守りたいという消費者の存在は大きな支えとなりました。

上の写真は地元の小学生の生きもの調査の様子ですが、残念なことにトキとの関係が深かったこの小学校も今年度末で廃校・統合されることとなりました。この活動も今後継続されるかは不明だそうです。田んぼも子供も減る一方ですが、前を向いて頑張ります。

